婦人のための情報誌

ねっとわあく

4号

静岡県

目次

特集　成熟化社会の家族像……2
◇あなたにとって家族とは……2
◇家族座談会「ある家族の一週間」……4
◇情報新時代とこれからの家庭……6
◇新しい「日本型」家族像をめざして……8
ティータイム……9
行政情報・主婦と年金……10
トップインタヴュー……11
雇用平等法制定への動き……11
はじめまして・グループ情報……12
海外スポット・アメリカの女性と家族……14
カナダのオートキャンプ……14
こだま・読者の声……15
本の紹介……15
編集員座談会・あとがきにかえて……16

あなたにとって家族とは

我が国は、経済の高度成長を経て、欧米先進国の生活水準に追いつき、今や物質的には世界に冠たる経済大国へと成長しました。そして、物中心の経済から、知識やサービス中心の経済へと移り、人々は多様な価値観の下に、ゆとりや調和といった面に価値を見い出す社会へと移行しつつあります。

これを、社会の〝成熟化〟と位置づけ、そうした視点から、現在の家族が直面している状況を見つめ直すため、3号につづいて「家族」を特集として取りあげてみました。

「あなたにとって家族とは?」と問われても、即座に答えるのは難しいかもしれませんが、「あなたが最も生きがいとしているものは?」という意識調査では、「家族・家庭」と答える人が一番多いのも事実です。人間にとって、やはり家族はかけがえのないものとして残りつづけるのではないでしょうか。

結婚・新しい旅立ち

藤原邦弘　さん

三ヶ日町
藤原邦弘　さん

結婚っていいものですね、と昨年十月に結婚したばかりの邦弘さんは、少し照れながら、新たな人生に意欲を燃やしています。

農家の長男に生まれましたから、大学在学中、みかん農業を営んでいる父が病いに倒れたのがきっかけで、親の老後をみながら先祖からの土地を守り、その中で農業の可能性を追求してみようと思った、と家業を継ぐ道を選択したいきさつを話してくれました。

家族とはやすらぎだと考えていますから、自分の育った家庭をモデルに、基本的には、夫は家族の経済的な責任を負い、妻は家庭内を取りしきるのが理想的だと思うけれど、実際には、百三十頭飼っている牛の世話など、手伝ってもらうことになります、と奥様への期待ものぞかせていました。

インタヴューを終えて、赤ちゃんが生まれれば四世代家族になるという風土の中で、家庭の絆を大切にしながら新しい農業経営と男としての責任に燃える邦弘さんに、昔ながらの日本の男性像を見た気がしました。

〔インタヴューアー・
編集員・白尾敬子〕

離婚・仕切り直しの人生

美尾　浩子　さん

家族というのは〝最も近しいよい他人〟というのが私の持論、と話してくれた美尾さんは、『男無用の子育て』という著書もあるエッセイスト。本のタイトルの勇ましさとは裏はらに、文章の行間には出直しを余儀無くされた家族たちへのさまざまな思いがあふれています。

静岡市
美尾浩子　さん

当時、家族のなかに自分を対等にぶつけることのできる相手がいなかったのがつらかったですね、と夫婦の心のすれ違いを回想し、どこの家庭にも事情があるとは思いますが、だれか一人だけが家族のしわよせを全部引き受けて、かろうじて崩壊を防いでいる、というのは、幸せな人間の生活ではないと思います、ときっぱり。＊

金婚・二人三脚半世紀

勝又重俊　さん
花子　さん

結婚したのは、戦争が人々の生活に影を落とし始め、五・一五事件などが起きた昭和七年です、と明治生まれとはとうてい見えないお二人が、代わる代わる夫婦の歴史を語ってくれました。

花子さんは、戦争中、一時家庭に入った時期があったものの、昭和三十九年に五十五歳で退職するまで、三人の男の子を育てながら仕事（教員など）を続けたキャリアウーマンです。もっとも、ご本人は、お義母さんが子育てから夕食の仕度まで本当によく協力してくれましたから、と謙遜しています。

一方、重俊氏は、東京へ単身赴任して家族の大切さを身にしみて感じた経験から、家庭の主婦が外で働くことについては、目的がはっきりしていて余裕があれば、と条件つきで賛成とのことでした。

現在、三人の息子さん達はそれぞれ独立していて、三男夫婦が道を隔てた向い側に、隣居中、夕食など、よんだりよばれたりのスープの冷めない距離の親子関係で、それが一番居心地がいい、と家族みんなの意見が一致しているそうです。

そして、二人とも、老人会につき合っている暇がなくて申し分けなく思っています、と言うほど、英会話や絵や古文書の学習、そして地域の神社や婦人会の世話役と、とても忙しくかつ主体的に生き生きと暮らしていらっしゃいます。

ささいな事で言い合いはしましたよ、と言いながらも、夫婦は時には夫唱婦随、又時には婦唱夫随でいいのではないでしょうかと、半世紀をともに歩いてこられたお二人は、信頼という絆でしっかり結ばれているように見受けられました。

〔インタヴューアー・
編集員・板垣靖子〕

裾野市
勝又重俊さん・花子さん

＊出直しを決意した時、長女は幼稚園児、次女は何もわからない幼なさ、だから子ども達には迷惑をかけたという思いがぬぐえないとのこと。それで、まず子ども達との生活の場を整えることから始めようと、借金をして家を建てましたと、心をくだいた苦労の一端も話してくれました。

二人のお嬢さん達も大学生へと成長された現在では、やっと、それぞれがお互いの考えや立場を理解して、距離をおいて認め合える良い他人になりました、我が家のライフステージで、今が最良の状態かもしれませんよ、と笑顔が戻りました。

お話しをうかがいながら、「離婚」がかなり日常化した現在でも、まだまだ女性にとってはハンディであることに変わりがない中で、十年以上も以前にその道を選択された勇気、そして形式だけの家族を求めなかった生き方が、今の充実した生活へと結実しているのだ、との感を強く受けました。

〔インタヴューアー・
編集員・夏目智子〕

写真・静岡新聞提供

家族座談会「ある家族の一週間」より

海外からは「日本人は働き中毒」などとやっかみ半分に非難され、新たな貿易摩擦!?などと心配されながらも、日本の男性、殊にうちの亭主の生活は、仕事中心、会社中心すぎるのでは、と実感している主婦は少なくないと思います。

婦人問題解決の鍵も、案外その辺に隠されているのでは——という視点から、静岡市にお住まいの大島さんご一家の協力を得て、一週間の家族の生活時間を記録してみていただきました。

結果は、編集部の期待どうり、家族全員が食事に顔をそろえたのは、日曜日の夕食一回限り、民間会社に勤める管理職の大島氏の、平均帰宅時刻は、午後九時四〇分でした。

お父さんは家で夕食がとれない

編集員—お忙しい十二月に一週間ご協力ありがとうございました。時刻を調べられているということで、皆さん意識なさったでしょうか。

妻——そんなことはなかったと思いますよ。でもこうして記してみると、やっぱりというか。朝食は各人が出かける時間が違うので全員がそろうのは無理だし、夕食は夫の帰宅時間が不規則なので子ども中心にならざるを得ません。そのかわり、日曜日は、全員そろって一時間半ぐらいかけて、おしゃべりしながらいただくんですよ。

佳己さん

夫——やはり、おつきあいなどもあって、定時には帰れないですね。それでも、私が帰宅すると、みんな部屋から自然に居間に集まってきたりしますから、意識して団欒の場を作ってはいませんけれど、気持は通じているんじゃないかと思っているんですが。

妻は結婚七年目頃生き方に迷いを感じた

編集員—奥様はご結婚以来ずっといわゆる専業主婦でいらっしゃったわけですけれど、その辺、不満に感じたことはないですか。

妻——実はありました。夫は気がつかなかったと思いますが——。丁度その頃は、責任のある仕事に追われ始めていましたから。

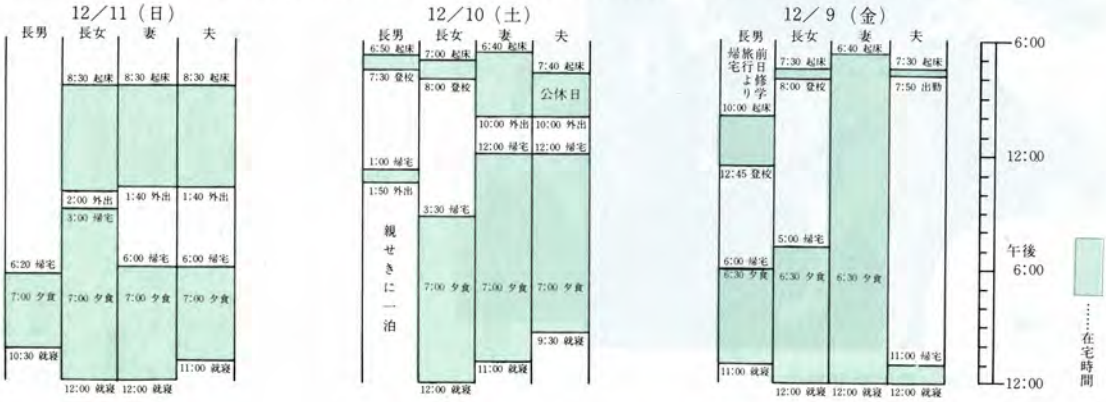
大変内面的な悩みだったと思うんですが、「このままでいいのか」と。自分自身の可能性のようなものを試して、家庭の外の社会でも自分を評価してもらいたいと、一人で悶々としていました。

そのうちに、自分の立場を冷静に見つめ直してみると、家族のために家にいるのがいいんだと、そう判断して諦めたというか、今は気持の整理もつきました。家庭にいる主婦なら誰でも、こんな悩みを持つのではないでしょうか。

夫——そんなことがあったとは気がつかなかった…。この頃は子ども達も大きくなったので、夫婦で出かけることもたまには。誕生日のお祝いなんかも、お互いに気にはかけているね。ただ、外国人のように、妻の喜びそうな物を自分で買い求めてきて、花束といっしょに贈るなんてことが照れくさくてできない

秀龍さん

♥大島さん一家の一週間の生活時間♠



んですよ。つい、「何かいい物を捜しておけよ」なんて任せてしまいます。

子ども達の将来設計

編集員―真由美さんや龍太君は、将来のこと考えることありますか。

真由美―今高二なので、当面は大学入試で、どんな大学で何を学ぶかですけど、将来職業として役に立つような資格が取れる所がいい、なんて友達とも話しているんです。父の考えと真由美さんは少し違うかもしれませんけど。

夫――以前は、女の子の大学教育というと花嫁道具の一つと考える傾向があったけれど、これからは、もし大学に行くのなら、一生いかせる資格の取れる勉強をさせたいと思っていますよ。

男の子の場合には、どうしても大学教育が必要でしょうが。

私の勤め先でも、最近は、子どもが生まれても辞めない女性が少しずつ出てきています。ただ、私は古いのかもしれないが、女性が家庭と仕事を両立させるにはそれなりの覚悟がないと、結局アブハチ取らずに終ってしまう。現実には、いろいろと難しい面を見ていますので。

妻――私としては、自分はできなかったけれど、これからは女性も仕事を持って社会に参加してゆくべきだと思いますから、娘にはそうしてほしい。お産の時や、孫の世話などで必要なら協力してあげたいと思っています。

心豊かな老後へ、今からウォーミングアップが必要

編集員―戦後の日本は、核家族化がどんどん進んできたんですけれど、ここへ来て、又三世代家族なども見直されていますね。龍太君は、将来ご両親といっしょに住んでもいいと思っているかしら。

龍太――うーんいいよ。いっしょに住めば。僕は家がとても居心地がいいから。

龍太君

夫――ただ、仕事の関係も出てくるだろうから、たまたまいっしょの所に住めれば同居すればいい。

妻――子ども達が独立し、夫が定年を迎えて毎日家にいる日が来ることを思うと――。今から共通の趣味を持ちたいと時々話し合っているんです。

夫――この頃中高年の離婚や、退職金が出るのを待っていて離婚なんていうケースもあると聞くけど。

妻――それは突然そうなるのではなくて、それまでずっと我慢していて、鬱積されていたものが一挙に出るのよ。そうなるまで妻の心に気がつかないほど忙しい夫が多いということ、考えさせられますね。

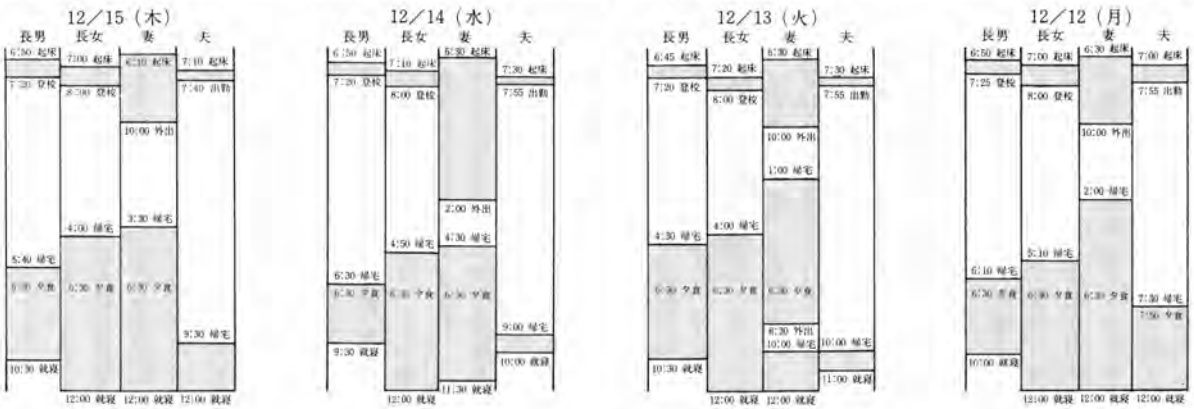
夫――どうも女性は難しいね。

座談会を終えて

主婦の自立にしろ、離婚や子ども達の問題にしろ、今「家族」に世の関心が集中するのにはそれなりの理由があるからで、大いに歓迎したい気持です。

大島家は、現在は、いわゆる病理的な家族問題には無縁のようですが、大島氏の生活が仕事中心すぎるのは、やはり気になるところです。

そして、楽観的な男性達とは反対に、妻と長女は、まとまりすぎている家族の中で過保護にされてしまっているのではないか、と冷静に自分達を振り返ってもいました。

夫婦にとって、これからの何十年かは人生の収穫期、さらに充実した家族史のページを加えられることをお祈りして座談会を終りました。

〔編集員・白尾敬子〕